

# 2017（平成 29）年度 U25 YOUNG OFFICIALS CAMP 報告書

大阪府 平出 圭佑

期日 2017（平成 29）年 8 月 11 日（金・祝）～13 日（日）

場所 上尾スポーツ総合センター、上尾運動公園総合体育館

講師 宇田川貴生 氏 平育雄 氏 吉田正治 氏 上田篤拓 氏  
平原勇次 氏 山崎人志 氏 加藤誉樹 氏 安西郷史 氏  
佐藤誠 氏 須黒祥子 氏 前田喜庸 氏 小澤勤 氏  
増渕泰久 氏

8 月 11 日（金）

## ①講義：FIBA 新レギュレーション（上田篤拓 氏）

2017 年 9 月から FIBA REFEREE が 2 年ごとの選抜制になる。

ライセンスが 3 つに分けられる。

Black License：エリート。どんな国際大会でもノミネートされるようなライセンス。

Green License：女子の国際大会を担当

White License：「アジア」などの地域の国際大会を中心に担当

選抜の候補生になるには

35 歳までに FIBA REFEREE になっていること

2 年間トップリーグを担当していること

1 年後、2 年後…と具体的に目標を定めていくことが必要になってくる。

## ②講義：3P0 メカニクス（上田篤拓 氏）

2P0 と 3P0 は全くの別物であり、技術として 2 つをしっかりとっておくこと。

3 人 1 チーム（クルー）としてお互いを大切にする。

3P0 の大原則：ストロングサイド（ボールサイドに 2 人）を作る

シンプルにストロングサイドを作ることが大切

Rotation がクルーとしてスムーズにできることが 3P0 において重要  
ボールが移動することによって、移動先で 1 対 1 やポストアップが起こるため、そのアクションエリアに対して 2 人の視野を当てる。

ボールがミッドにきたら close down

センターサイドにきたら Rotation

→「ポストプレイがあったら Rotation」などクルーの中でそれぞれバラバラの考えをもっている人がいると崩壊する。

\*センターサイドからのクイックドライブやクイックショットに対しては Rotation せず、センターの Primary として対応する。

リードは走って Rotation しない→テンポよくシャープに  
走るとクルーを困惑させてしまう

Scan the paint しながらローテーションすること

2 パターンある

- ・ペイントをスキャンする
- ・ペイントで何も無いときは、Rotation 先のプレイをオリジナルセンターと協力する

センターはリードが Rotation してきたからといってすぐにトレイルにならない  
→自分のプレイがパスなどで相手の Primary になるまではプレイにステイする。  
→ダブル・センターは OK (ダブル・トレイルになってしまうことが一番怖い)

トレイルはリードの Rotation と同時に移動を開始し、ペイント内のプレイをつかみにいく  
(pick the paint)

Primary エリアに Primary アングルが入ってくる。

エリアを越えて見えるものはメカニクス (Primary アングル) として説明できる。

→Primary エリアであっても見えないケースがある

→エリアにとらわれず、Primary アングルとして見えたものは積極的に判定していく

### ③フロアトレーニング：3P0 の動き (トスアップ、リードなど)

---

- 1、トスアップ後の 3 人の動き
- 2、リードの Rotation
- 3、2 分のモデルゲームを用いた実践

リード : close down → Scan the paint → Rotation

ファウルレポートは声（英語）を用いて行う。

加藤誉樹 氏のアドバイス

全体的に自信がなさそうに見える。オンザコートでは Referee がファウルと判断したらそれはファウル。その判定に疑問がある場合は後の反省で講師や主任が修正をしてくださる。それを聞いて修正していけばいい。その方が成長に繋がる。よって、オンザコートでは自信をもって演じる、やりきる。

自信をもってやるために

声をどう使うか

プレゼンテーション（ディレクションなど）

#### ④講義：ガイドライン（宇田川貴生 氏）

---

ガイドラインは判定基準として示したものである。判定をする上でガイドラインを適用していくためには、まずメカニクスをきちんと身につけなければならない。自分の Primary やアングル、約束事についての共通理解をもって、誰（クルー）とやっても同じメカニクスでやっていくこと、そのうえで常に同じように判定していくことがガイドラインの願いである。

ファウルとは何か？

触れ合いの事実

触れ合いの責任

影響：R（リズム）、S（スピード）、B（バランス）、Q（クイックネス）

1つでも崩れているかどうか

我々 Referee は判定について説明する責任がある。

「形」ではなく「なぜ」を説明できなければならない。

その説明するときの根拠となるものがガイドラインの中に入っている。

ファウルの3つの要素について、シンプルに1つひとつ当てはめて論理立てていく。

ガイドラインを作成するにあたってポイントになったのが「クリーン」「FOM (Freedom of Movement : オフェンス・ディフェンス共にコート上を自由に動く権利)」

悪い手、腕、肘はその時点では何も影響 (RSBQ) はないかもしれないが、その後の試合

でラフなプレイを引き起こす原因となる。

→「ハンドチェックについては、触れ合いの度合いで判断せず整理すべきプレイである」

=「軽い判定（チープなファウル）とは区別する」=オートマチックに吹きましよう

\*ハンドチェックはボールを持っているプレイヤーにのみ成立する

リアクション（やり返し）/アクション（仕掛け）

どちらが先に仕掛けたのかをきちんと見きわめ、基本的にダブルファウルとはせず、きちんとアクション（仕掛け）に対して笛を入れること。

→アクションを捉えるためにはプレイを長く見る必要がある

→そのためにはメカニクスが必要

=正しい判定にはメカニクスが絶対条件

リーガル・ガーディング・ポジション

→面と向かい合って、両足を普通に広げて床につけている

シリンダー（権利）

自分の権利を越えて触れ合いを起こしてはならない

トラベリング

全日本の女子が国際大会で活躍するようになったと同時に、国際大会でトラベリングをコールされることが多い。これからさらに活躍していく上で、トラベリングによって実力を発揮できなくことを防ぐためにも Referee として技術を伝えていかなければならない。

明らかな軸足の踏みかえ・軸足のずれ・突き出しの遅れについてきちんとコールすること。ポイントは「明らかなもの」であること。グレーなものが鳴って、明らかなものが鳴らないということがないようにしなければならない。

「プロテクト・シューター」に記載されている「オフェンス側プレイヤーが着地する時、ディフェンス側プレイヤーの足等が触れ合いを起こすこと」、「アンスポーツマンライクファウル」に記載されている「首から上の顔面・頭へ肘を使ったコンタクト」「手・腕による首から上のファウル」などについては、選手生命に影響する危険なファウルとして故意でなくとも確実にコールすること。

8月12日（土）

①3P0 実技（4人ローテーション）

---

○都立駒場 vs 春日部          都立駒場 vs 所沢西

Referee : 東郷 氏 (滋賀)、平出、土谷 氏 (徳島)、青柳 氏 (佐賀)

講師 : 増渕泰久 氏

- ・クルーで Rotation やフリースローのときなどのポジションをしっかりと確認する。
- ・Rotation ミスやポジションミスがあったとき、クルーとして仲間に教えることは間違いではないが、手を使って大きく指示を出すと仲間の心理に影響してしまうこともあるので気をつける。また、それを見たベンチからの Referee に対する信頼が薄れてしまうこともある。
- ・24 秒の確認をしっかりとる。
- ・試合終了間際の時計の管理について、オポジットレフリーが担当する。ラスト 1 プレイをクルーで共有し、時計を管理すること。
- ・Rotation や Primary について失敗したとしてもそれを認識できていればよい。認識できていれば次の具体的な対策に繋げることができる
- ・リードの動きを見ておかなければならないと考える必要はない。ストロングサイドを作るといふ共通認識があれば、ボールが自分の Primary にきたときに「Rotation してくるよね？」という意識が生まれるため、意識しなくても自然にリードの確認ができる。共通認識があるからといって勝手にトレイルになることがあってはならない。共通認識をもちながらも、必ずリードの Rotation を確認してから移動する。

○上尾鷹の台 vs 鴻巣          都立駒場 vs 鴻巣

Referee : 遠山 氏 (長野)、長田 氏 (愛知)、東郷 氏 (滋賀)、平出

講師 : 前田喜庸 氏

- ・フィットネスに軽快さがあり不安を感じさせないところが良かった。
- ・悪い手・腕・肘 (ハンドチェック) の整理がクルーとしてできていない。悪い手の使いからドリブルしている選手へのイリーガルな体の寄せが起こっている。クリーンなゲームという意味でもう一度ガイドラインを確認すること。
- ・映像を見ながら、現象が起こったとき、その現象の Primary は誰なのかをきちんと認識すること。そこからセカンダリーは誰なのか、プレイに対するポジションアジャストの方法はどうであったか、Rotation のタイミングはどうであったかなどを確認していく。

②講義 : プレゼンテーション (加藤誉樹 氏)

---

Referee が必要とされるのは、お互いのチームのセルフジャッジでは決着をつけることがで

きないとき→シビアなゲームであればあるほど正しい判定だけでは足りない。

プレゼンテーションはおまけではない→FIBA でも正しい判定と同じくらい大切

Verbal support : 声を使う

Signals : シグナル、ジェスチャー

Strong body : 体つき

In Charge : 責任、担当

“I AM IN CHARGE” 私がこのゲームの責任者です。

“GIVE A NON-VERBAL MESSAGE THAT YOU ARE ABLE AND READY TO MAKE DECISION”

判定する準備ができていると声を出さずに示しましょう。

→態度で示す（責任をもつ、謙虚に、サービス精神で）

コミュニケーション

Word : 7%

Voice : 38% (声の質…高い、低い、抑揚 etc)

Body Language : 55%

→コミュニケーションの9割がプレゼンテーションで決まる

→印象がとても大切

USE AUTHORIZED SIGNAL : 決まっているシグナルをやろう

→工夫をしたその人オリジナルのシグナルを使っている人もおられるが、FIBA を目指すのであれば世界共通の決まったシグナルを使うこと。

すぐにできないこと（寝て起きてできないこと）は今すぐに取り組む

→English、体づくり etc…

③講義：映像研修（映像解析の方法、実際の試合映像を用いた解析など）

（宇田川貴生氏 上田篤拓氏）

---

映像を見るポイント

- ・何を具体的に次にしていくのか
- ・どう自分のものとして蓄積させていくか

仮説と具体的対策を立てていく

(例) トラベリングがコールできなかった

→なぜコールできなかったのか？

→どうやったらコールできるのか？

(例) ファウルが起きたとき

センターがコールしたからよかった→×

なぜコールできたのか？ (Rotation のタイミング etc…)

事が起こったとき、その前に具体的な答え (要因) がある。

- Rotation のタイミング
- ポジションアジャストは適切だったか？
- どんなプレイの流れでその現象が起こったのか？

選手のアピールはヒントになる。

→アピールの要因は何か？その前に何かある

自分の映像を解析する

- 「できた」理由、「できなかった」理由まで分析し、具体的な対策を立てて次のゲームに臨む。
- 自分の動きに注目する。なぜそう動いたのか？理由のある動きと無意識な動きは大きな違いがある。
- 自分の癖を見つけて、具体的な対策を立て、意識して修正していく。

映像にはキリがなくなるほど情報が詰まっている。こだわればこだわるほどいろいろな要素が出てくる。何にフォーカスをしていくのか？

やったもの勝ち→やればやるほど成長

8月13日(日)

#### ①3P0 実技 (4人ローテーション)

---

○鴻巣 vs 都立駒場      元石川 vs 上尾鷹の台

Referee : 阿部氏 (岩手)、長田氏 (愛知)、東郷氏 (滋賀)、平出

講師 : 小澤勤氏

- リードの Rotation のときの Scan the paint をもっと意識する。

- ・ドライブに対してのポジションアジャストについて、cross step を用いてオープン・アングルを確保できるようにする。
- ・4Q で競っている場面での時計の管理は良かった。時計が動いているのか、あるいはきちんと止まっているのかを確認することはとても重要。
- ・センターPrimary のケースでのリードからのコールや動きながらの判定があった。失敗したときにきちんとそれを認識できていれば良い。次に繋げていけば良い。
- ・オールコートプレスの際の3人の協力について、センターが残ってカバーしていくようにする。リードもフロアバランスを考慮し、すぐにエンドラインに入らずにカバーする動きが必要なときもある。

## 感想

---

将来のFIBA REFEREEを養成するという趣旨のもと3P0をメインとしての講習会であり、普段3P0をする機会がない中で貴重な経験でした。3P0の大原則である「ストロングサイドを作る」という共通理解をもつという内容の中で、「共通理解」をもつことがとても大切だということに気づくことができました。「ストロングサイドを作る」という共通理解があることによって、ボールが自分のPrimaryにきたときに意識しなくても「Rotationしてくる」と自然に意識が向くようになる。2P0であっても3P0であっても共通理解をもってやることによって自分が見るべきPrimaryに集中できるようになるのではないかと感じました。

ガイドラインについての講義があり、自分自身がいかにあいまいなまま判定をしていることを痛感しました。我々には判定(コールしたもの、ノーコールのもの)に対して説明する責任があり、その根拠をしっかりと自分の中に持っていなければならないと感じました。ガイドラインにはその根拠が書いてあり、自分のものにして説明できる判定ができるように心掛けていきます。

コートの上での取り組みはもちろんのこと、コートの外でできることも多くあることを改めて感じました。映像分析の方法なども学ぶことができ、今までなんとなく見ていたものを自分のものとして蓄積していくことができるように取り組んでいきます。

YOCに参加させていただいたことはとても大きな経験になりました。今回の経験を少しでも多く選手に還元できるように取り組んでまいります。

最後になりましたが、講習会にあたって支援してくださいました講師の方々、埼玉県協会の方々、選手の方々、関係者の方々に深くお礼を申し上げます。